

かず
数のかぞえかた

おおおか まこと
大岡 信

わたし ねんしょう にはん さつ かだいひょうだん いちいん ちゅうごく ほうもん
私 は一九七六年初冬のころ、日本作家代表団の一員としてはじめて中国を訪問した。その

とき たび どうこう すうにん ゆうしゅう ちゅうごくがわ つうやく
時の旅で同行してくれた数人の優秀な中国側の通訳のひとりに呉従勇さんがいた。呉さんか

き わす はなし
ら聞いたエピソードで忘れられない話がある。

ときかれ にほん い がくし せつだんいっこう つうやく どうこう なに はなし お ひと かず
ある時彼は日本の医学使節団一行に通訳として同行した。何かの話の折りに、人の数をか

ひつよう しょう かれ かぞ
ぞえる必要が生じて、彼はこう数えたという。「ヒトリ、フタリ、ミツタリ、ヨッタリ……。」

い いっこう に さんにん ぶえんりょ たかわら い
そこまで言ったとき、一行の二、三人が無遠慮に高笑いしてこう言ったというのである。「や

ちゅうごくじん い
っぱり呉さんは中国人ですなあ。それはヒトリ、フタリ、サンニン、ヨニンと言うんですよ」

きず い にんずう
呉さんは傷ついたらしかった。「なぜ、ヒトツ、フタツ、ミツツ、ヨツツと言うのに、人数

とき い つぎ
をかぞえる時にはヒトリ、フタリと言ってその次にはサンニン、ヨニンとなるのでしょうか。

にほんご ふくざつ わたし はじ
日本語は複雑ですねえ。私はおかげで恥をかきました」

は おも わたし はじ わら せんせい
恥ずかしい思いをしたのは私のほうだった。「呉さん、恥をかいたのは呉さんを笑った先生

にほんじん むかし い
たちのほうですよ。日本人も昔はミタリ、ヨタリと言ってたんだから」

れい にほんご にほんじんじしん き きみょう
呉さんの例でもわかるように、日本語には日本人自身あまり気がついていない奇妙な、

ひ ごうり ようほう ごほう おお かず ふくざつ けんちょ いちれい わたし した
つまり非合理的な用法や語法が多い。数のかぞえかたの複雑さはその顕著な一例で、私の親し

じん きしやふさい にほんぶんか かんしん にほんごがっこう かよ にほんご
いフランス人のラジオ記者夫妻も、日本文化に関心をもち、パリの日本語学校に通って日本語

まな かず むず ざせつ
を学びはじめたものの、数のかぞえかたがあまりに難かしいため挫折してしまった。

にほんご かぞ しゅるい とくてい せつびご つか
日本語では、ものを数えるとき、そのものの種類によってそれぞれ特定の接尾語を使う。

せつびご じょうし ぐあ
この接尾語を助数詞というが、たとえばこんな具合である。

いえいっけん いっこ い す いっきやく いぬ ねこいっぴき うま うしいつとう じどうしゃいちだい でんしゃいちりょう かみいちまい か し
家一軒・一戸、椅子一脚、犬・猫一匹、馬・牛一頭、自動車一台、電車一両、紙一枚、菓子

いっこ ひとふくろ ひとはこ かわひとすじ ぎあんいっけん くすりいっぶく くつ げ た いっそく いってき しぶんいっぺん たんか
一個・一袋・一箱、川一筋、議案一件、薬一服、靴・下駄一足、しずく一滴、詩文一編、短歌

いっしゅ はいくいっく しょせきいっさつ てがみいっつう ふくいっちやく すもういちばん とうふいっちよう とりいちわ はかいっき はないちりん
一首、俳句一句、書籍一冊、手紙一通、服一着、相撲一番、豆腐一丁、鳥一羽、墓一基、花一輪

いっぽん ひとふさ ひとつぶ ふねいっせき
・一本、ぶどう一房・一粒、船一隻エトセトラ。まだまだいくらでもあります。

あ、これでは外国人ならずとも難かしいよ。そう思う日本人がどんどんふえてきて、今で

いっこ かた けいこう つよ し わら いがく
は一個とかヒトツとかで片づけようとする傾向も強まっている。呉従勇氏を笑った医学の

せんせい ぜんぶ つか わ あや
先生たちだって、全部きちんと使い分けられるかどうか怪しいものだ。

ふくざつ たんじゆん か いまれつきよ じょうし みなお
でも、複雑だから単純化すればいいというものでもない。今列举した助数詞も、見直して

あじ し し ほう おもしろ かん ぶんか
みればそれぞれに味わいがあって、知らないよりは知った方が面白いと感じられる。文化と

あつ ところ あら い
いうものの厚みもこういう所に表われると言っていいだろう。

しじん とうきょうげいじゆつだいがくきょうじゆ
(詩人・東京藝術大学教授)